

II 研究テーマへの取り組み

1 研究テーマ設定の趣旨

本校は、昭和60年度より研究主題を「発達と障害に応じた教育をめざして」、副題を「個に視点を当てた指導の実践」と定め、児童生徒一人ひとりにおいて最も必要な指導上の課題を取り上げ、一人ひとりの児童生徒を対象とした事例研究を3年間にわたり実践してきた。この実践研究では、一人ひとりの児童生徒の発達段階を的確につかみ、発達の偏りや壁を探して、それらを乗り越えさせるための手だてを考えるとともに、発達の偏りについても軽減・矯正するための手だてを検討しつつ、個に適した教育内容、指導法を模索してきた。

これらの研究を進める中で、我々は、いかなる発達の遅れや偏りをもつ児童生徒であっても、彼らの障害の根底を為す共通の課題としてからだづくりがあるのではないかと考えるに至った。

どのような児童生徒であろうと、彼らが本来有している内在的能力を十分発揮させるためには、その基盤となるからだづくりが必要である。本校の児童生徒においても例外ではなく、からだづくりが十分にできていないがゆえに、内在的能力が十分発揮できない、発達の壁が破れない、また発達の偏りが軽減できないという事実があるのではないかと考えられた。すなわち、からだづくりを充実させていくことにより、個々の児童生徒の内在的能力がさらに発揮されやすくなるとともに、集中力、持続性、取り組み意欲などの高まりによって学習効果をより期待することができるのではなかろうか、さらに可塑性の高い生活年齢の低い児童においては特に、からだづくりをする過程で全体的な発達をさらに促すことができるのではないかと考えたのである。そこで、副題を新たに「からだづくりを通して」と設定し、研究実践に取り組むこととなった。

2 研究テーマに対する基本的な考え方

(1) 研究主題「発達と障害に応じた教育をめざして」について

「発達に応じた教育」とは、発達の遅れに対応した教育を指す。知的発達、身体的発達などにおける遅れに対して、現在の発達段階を的確につかみ、発達のつまづきや壁を探して、それらを克服したり、乗り越えさせるための手だてを考え、実践する教育である。

一方、「障害に応じた教育」とは、発達の偏りに対応する教育を指す。たとえば、極端な多動や固執、てんかんをもつ児童生徒の発作、脳性まひ児の身体機能における不随意運動など、単に発達の遅れという視点だけでは捉えられない問題がある。このような問題を軽減したり、矯正したりする教育も必要であり、それらを指して「障害に応じた教育」と捉えている。

しかし、発達の低い段階においては、発達の遅れなのか、偏りなのか区別できないこともある。そのような意味もあり、「発達と障害に応じた教育」というように2つの内容を合わせた形でも

捉えられるよう主題名を設定した。

さらに、「発達と障害に応じた教育」の中での「応じる」ということばの意味について説明を加えたい。「発達と障害に応じた教育」とは、発達の遅れに対して発達を促進させたり、発達の偏りを矯正・克服するばかりの教育を指すのではなく、現在備わっている力をどのように生かすかということも重要な課題となってくる。つまり、「応じる」とは、個々の児童生徒の現段階における発達の程度、障害の程度を認めた上で、どのように現在備わっている力を使っていくのか、どのように社会参加を目指していくのかという現実的な視点も含んでいるのである。

(2) 副題「からだづくりを通して」について

① 「からだ」とは

知恵遅れの児童生徒は、精神発達の遅れのみならず、何らかの身体的発達の遅れを有している場合が多い。肉体的には身体的発達に遅れがないように見える精神遅滞児であっても、思わぬところで不器用さがでるということはよく指摘されるところである。すなわち、知恵遅れの児童生徒は、ほとんどの場合、身体に関する課題をもっているということである。

一般に「体ができている」という時、身体そのものの形態に着目している場合とその身体から表出される機能に着目している場合があると考えられる。身体の骨格がしっかりとし、筋肉質で引き締まった身体を指して「体ができている」という場合もあれば、少々動いても息があがらないこと、ボールが遠くへ投げられること、重たいものを持ち上げることを指していることもある。成長過渡期の児童生徒を対象とした体づくりは、その両面を考えたアプローチが必要であろう。

より好ましい体をつくっていくためには、まずは取り組む本人自身の強いモチベーションが必要である。強い動機づけ、必要感がなければからだづくりも長続きしない。また、できた身体を生活課題に進んで使っていくのにも意欲や意志が必要である。さらに、もっと小さな単位でみれば、体づくりのための大切な要素である一瞬一瞬の動きも本人の意志や意欲を必要とするのである。このように考えれば、体づくりにはその人の精神発達、及びその時々の方の精神の状态（意欲のあるなし等）が大きく関与することがわかる。

そこで、我々は、身体と精神機能は相補的關係にあり、切り離して考えることのできないものと捉え、それらを合わせたかたちで「からだ」と呼ぶこととした。

② 暦年齢及び発達年齢からみたからだづくりの課題

からだづくりでは、何をねらい、どのような取り組みにおける児童生徒像を期待するのか、それは児童生徒の発達に対応して考えていかなければならない。乳幼児期のからだづくりと青年期のからだづくりでは、ねらいも目指す児童生徒像も異なってくる。

健常児の場合を考えてみたい。乳幼児期のからだづくりのねらいは何であろうか。乳幼児期、特に出生から2歳にいたる乳幼児の成長・発達においては、感覚・運動という2つの機能が重要な役割を果たしていることは、多くの研究者らから指摘されてきている。小林ら（幼児のた

めのムーブメント教育実践プログラム(7), P12, 1988) は、「子どもの初期発達には、まず身体運動面の機能が軸となって展開し、これを土台にして知的、心理的側面の機能が引き出されてくる」と乳幼児の発達における身体運動の重要性を述べている。このことから乳幼児期のからだづくりでは、人間発達の土台を築くことをねらいとし、感覚に効果的に働きかける身体運動を取り入れなければならないことがわかる。

また小学生段階では、感覚を通した脳のたがやしをある程度終了するため、主として調整力をねらったからだづくりが必要となるであろう。さらに中学生段階においては、第2次性徴期の溢れでるエネルギーを発散させながら、調整力に加えて、持久力や筋力をねらったからだづくりが必要となる。また身体の充実期を迎える高校生段階になれば、自己抑制できる力をつけながら、持久力、筋力を中心としたからだづくりが必要となるのではなかろうかと考える。つまり、その暦年齢に合わせた身体の課題を十分に保障するからだづくりが必要なのである。

では、精神発達と身体的発達にアンバランスさが、見られる精神遅滞児のからだづくりは何を指標にねらいを決定すればよいのであろうか。それは、やはり発達年齢及び暦年齢ともに考慮して決定すべきであろうと考える。

本校の小学部の段階(CA6:0-12:0、MA2:0-6:6)のからだづくりは、発達年齢の低さ、及び暦年齢の低さがということも考えて、人間発達の土台を築くことをねらいとし、感覚に効果的に働きかける身体運動を中核に据えた取り組みが必要であろう。また、中学部の段階(CA12:0-15:0、MA3:0-8:0)の「からだづくり」は、中には発達年齢の低い段階の生徒もいるが、身体的には第2次性徴期に入る時期であることから、身体的発達にそった、たくましい身体や溢れでるエネルギーを課題や生活に生かし使い、発散して、このことにより充実し、安定した心を育てる「からだづくり」を、目指すのが妥当と言えよう。さらに高等部の段階(CA15:0-20:0、MA3:0-10:0)の「からだづくり」は、第2次性徴期をすぎて、身体の充実期に対応するものとなる。身体的には、持久力、筋力の向上を目指した「からだづくり」を必要とする時期である。また、精神的には、力いっぱい活動する動的な取り組む姿と、自己抑制しながらがまん強く活動する静的な取り組む姿の2面が要求される時期であると言える。

このように精神遅滞児の「からだづくり」は、精神発達及び身体発達のアンバランスさがあるが故に独自の方法が必要であるが、ねらいとしては健常児のからだづくりと比べて特に変わったものがあるというわけではない。

③ 障害からみたからだづくりの課題

発達の偏りに対応したからだづくりも一方では必要である。本校は知恵遅れの児童生徒を対象とした養護学校であるが、中には軽い肢体不自由があって、筋肉の硬化を防ぐ訓練を必要とする児童生徒や歩行訓練を必要とする児童生徒がいる。また、内言語は育っているのかかわらず、音声表出ができず、その訓練を必要とする児童生徒もいる。

これらのような障害に視点をあてたからだづくりは、発達を促進するというより、障害を克服・軽減するために行われるものであり、その課題は児童生徒一人ひとりによって異なる。従って、これらのからだづくりは個に応じた手だてや配慮を工夫しながら行われるべきものであるといえる。

(1) 研究の構想

① 研究の構想図

下に示したのが研究の構想図である。我々は、研究主題に唱えられている発達と障害に応じた教育を求めつつ、日々実践に取り組んでいる。具体的には、小学部では、自立化に重点を置きながら、段階別教育内容表本校が独自に作成した教育課程編成の基となる教育内容表のⅠ－Ⅲ段階の内容を、中学部では、小学部で培ってきた力を基に社会化に重点を置きながら、段階別教育内容表のⅢ－Ⅳ段階の内容の定着を目指した教育を行っている。さらに高等部では、中学部で培ってきた力を基に職業化に重点を置きながら、段階別教育内容表のⅣ－Ⅵ段階の内容の定着を目指した教育を行っている。つまり児童生徒の社会的自立を目指して、その発達段階に応じた教育内容を定着させていくように考えている。

そこで、個々の児童生徒の社会的自立を促すための当面の目標として、個人目標を設定することにした。個人目標は、発達の遅れ、発達の偏り、性格行動上の特性という観点から設定され、教育活動全般の中で達成されるものである。その個人目標は個々によって異なるが、一人ひとりの個人目標に迫る共通課題としてからだづくりがあるということである。

からだづくりをすることによって身体の状態や機能に向上が見られ、それが個人目標に直接的に良い効果をもたらすこともあろうが、むしろ間接的にではあるがからだづくりを通して培われた意欲・態度などが、個人目標達成に大きな効果をもたらすのではないかと考えた。このような意味で、右図のようにからだづくりからの取り組みが、個人目標へ横から介入するよう表すことにしたのである。からだづくりからのアプローチによる援助を受けて、個人目標は達成されやすくなる。さらに個人目標が達成されるということは、個々の児童生徒が社会的自立へ向けて大きく前進していくということにつながっていくのである。

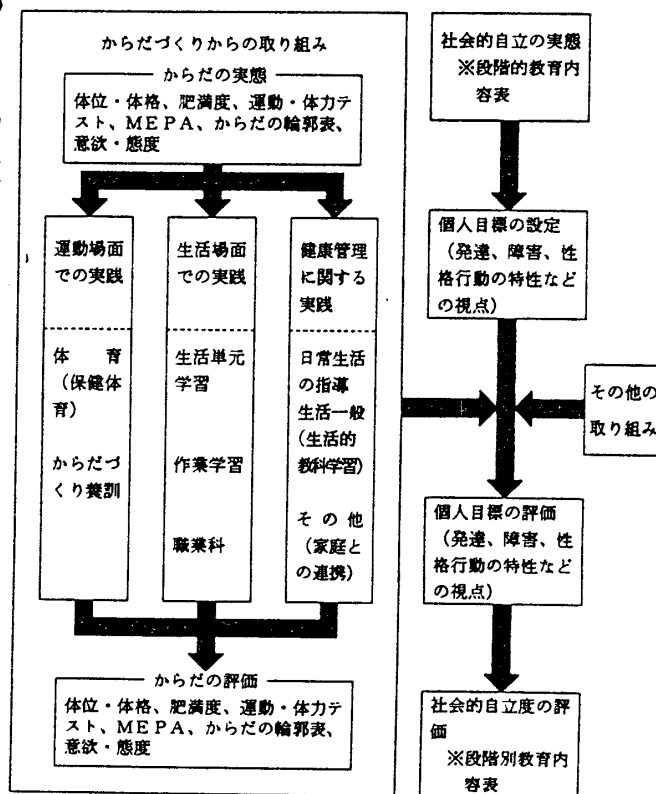


図1 研究の構想図

② 「目指すからだ像」の段階的発展性

図2に示すように小学部、中学部、高等部と段階的発展性を考えて、「目指すからだ像」を設定した。小学部の段階は、感覚・運動を大切にし、脳をたがやす段階である。それ故、身体の動かしかたを知らない児童に楽しんで1つ1つの動きを経験させるという主旨で「からだを動かすことを楽しむ子」というからだ像を設定した。中学部の段階では、小学部の取り組みで培ったからだを基に、この時期が思春期の伸びざかりの時期であることを踏まえて、その身体を楽しく、思いきり、熱中して活動させることこそ更なる発達を促すことになるのだと考え、「楽しんで、力いっぱいからだを動かす子」というからだ像を設定した。さらに高等部の段階では、中学部の取り組みで培ったからだを基に、中学部の力いっぱいからだを動かすという基本姿勢を受け継ぎながら、さらに見通しをもって主体的に活動すること、静的に自己抑制しながらがんばる姿をも少し強調し、「すすんで、生き生きとからだを動かす子」というからだ像を設定することにしたのである。

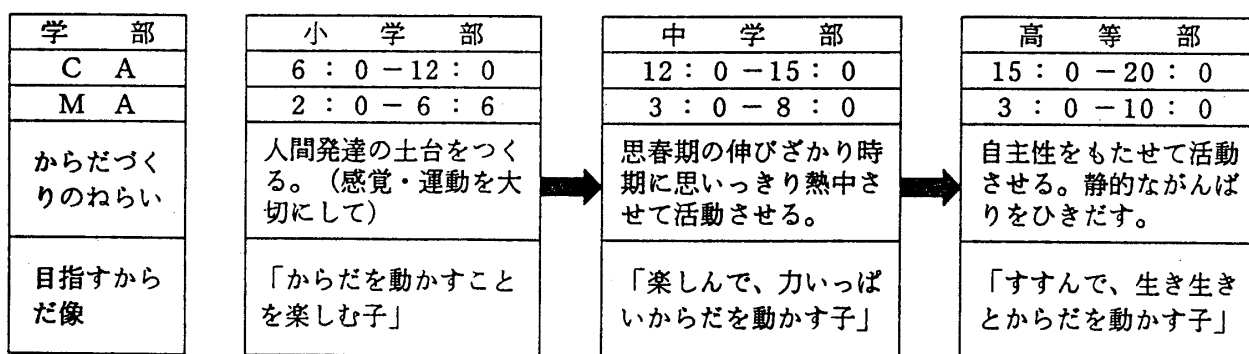


図2 目指すからだ像

③ 取り組みの場

からだづくりの取り組みの場は、実践を進めていく中で、表1に示すように3つの分野に整理することができた。それらは、体育(保健体育)、からだづくり養訓に代表される「運動場面でのからだづくり」、また生活単元学習、作業学習、職業科に代表される「生活場面でのからだづくり」、さらに日常生活の指導、保健指導に代表される「健康管理を通してのからだづくり」の3分野である。

これらの1つ1つの分野において、小、中、高の学部間のつながりや発展性があるような取り組みを考えた。

表1 各学部の取り組みの分野及び教科・領域

分野 \ 学部	小 学 部	中 学 部	高 等 部
運動場面での実践	○からだづくり養訓 ○体育	○からだづくり養訓 ○保健体育	○からだづくり養訓 ○保健体育
生活場面での実践	○生活単元学習	○生活単元学習 ○作業学習	○職業科 ○生活一般 (生活的教科学習)
健康管理に関する実践	○日常生活の指導 ○その他(家庭との連携)	○日常生活の指導 ○その他(家庭との連携)	○日常生活の指導 ○生活一般 (生活的教科学習)

3、取り組み

1年次、2年次、の取り組みにおいて、これまで述べてきたような研究の理論構成及び実践方法等、大体の骨子ができあがったので、昨年度(3年次)から本年度(4年次)にかけては、それらの成果を基に実際の取り組みにウェイトを置いて研究実践を行なうことにした。

(1)昨年度(3年次)の取り組み

3年次は、2年次までの成果を基に、①授業研究会を討議の場とし、主として各学部単位で実践の充実を図ること、②3つの取り組み分野の中でもとりわけ「運動場面でのからだづくり」(特に「からだづくり養訓」)について、小、中、高の連関を図ること、の2つの課題を設定して研究実践に取り組んだ。

① 「授業づくり」の取り組み

1つひとつの実践の最小単位は授業であり、充実した授業の積み重ねこそが、各学部の目指す児童生徒のからだ像に迫るための大きな要因となる。つまり、実践の中でとりわけ重要なのが、この「授業づくり」であり、その充実を図っていくことを共通理解した。

「授業づくり」は各学部の教育課程に基づき、学部単位を中心として行ってきたが、各学部3回ずつの研究授業及び授業研究会を行い、そこで修正・再検討しながら、さらにより良き授業を目指した。その結果として、表2に示すような授業を構想したり、評価する観点が実践の中から見いだされた。

表2 授業の構想及び評価の観点

	観 点	そ の 内 容
ア	単元・題材の設定及び年間指導計画の立て方	精薄養護学校では特に、教材探し・教材づくりという創造的な仕事に当面する。学習集団の実態を把握し、かつ、「からだづくりを通して」という観点を十分踏まえた上で、単元・題材の選定及び年間指導計画の作成をしていく必要がある。
イ	1単位時間の授業の組み立て	1単位時間の中で、どのような学習過程を組むかということである。
ウ	授業における指導者の関わり方	指導者と補助的指導者とのチームティーチングのあり方。児童生徒に対する指導者の関わり方。援助、介助の程度の判断及び仕方。師範の示し方など。
エ	教具の工夫	教具が児童生徒の実態(発達、障害、暦年齢、興味・関心)に合ったものであるかどうか。
オ	取り組み意欲のもたせ方	児童生徒が楽しさを感じたり、見通しがもてるような配慮がしてあったのかどうか。また、精神発達に合わせて「競争」など心的なゆさぶりがあったのかどうか。
カ	個を生かす指導の工夫	障害、精神発達の程度など多様な児童で構成される学習集団において、個のニーズを生かす指導はいかにすべきか。①グループの編成の仕方(学習課題別、能力別、習熟度別)②課題の設定及び教材の工夫(同一教材・複数課題、同一課題・複数教材)
キ	専門的知識、技術の習得	授業として教材化する以前の問題として、その内容に関わる専門的な知識及び技能の習得に努めた。大学の先生より、その道の専門的な指導を受けた。

表3 からだづくり養訓の取り組み内容一覧表

学部	指導形態	主たるねらい	感覚運動の発達段階(MEPAに準拠する)								その他の取り組み	指導方法及び留意点
			0:0-1:0	1:1-1:6	1:7-3:0	3:1-4:0	4:1-5:0	5:1-6:0	6:0以上			
小学部	一斉	感覚運動の発達	寝返り		横ころがり	前転 ぶら下がり 手押し車					バンプダンス	(小学部) 本年度は、正確な動きを経験させるといふことを主たるねらいとして取り組んでいるが、一斉指導という形態はとっているが、同じ活動の中にも援助の仕方を変えつつ、個の実態に合った指導を心がけた。また、遊びの要素を取り入れ児童が楽しみながら取り組めるよう配慮した。
	A	感覚運動の発達 筋力の強化	寝返り 四つばい 高ばい	歩き	走り 立ち回り 両足とび 横ころがり	スキップ	肋木のぼり 上体起こし (2人ペア)		上体そらし (2人ペア)	5分間走 ダンス		
中学部	B	感覚運動の発達	寝返り 四つばい 高ばい	歩き	走り 立ち回り 両足とび 横ころがり	スキップ	肋木のぼり 上体起こし (2人ペア)		上体そらし (2人ペア)	5分間走 ダンス	(中学部) リズム表現とサーキットの2本立てで構成されている。リズム表現は一斉指導で行われ、音を聞くこととそれを動きに表出すること、つまり感覚機能と運動機能の統合を主たるねらいとして行われている。また、サーキットは、感覚運動の発達に加え、Aグループは筋力の強化、Bグループはボディイメージの獲得を主たるねらいとして行われている同じ活動をさせると同時に教具や援助の仕方を交えて取り組ませている。	
	a1	運動量のこなし 感覚運動の発達			両足とび 走り		上体起こし チューブで			10分間走		
高等部	a2	運動量のこなし 筋力の強化 持久力の向上			両足とび 走り		上体起こし チューブで 直線上歩き			10分間走 腕立て	(高等部) 高等部で特徴的なのは、生徒のからだの実態が分析され、その結果より5つの課題別グループを編成されている点である。まず最初に、このグループごとに課題別トレーニングが行われ、その後に生徒の共通課題である持久力、筋力の向上を目指した10分間走が一斉に行われる。10分間走は、個々のペースで取り組み、かつ個々のためあてをこたせつつ指導できるといふことからの指導法が取り入れられている。	
	b	調整力の向上 持久力の向上	歩き	走り	ぶら下がり 片足とび	上体起こし 平均台歩き		鉄棒さか上がり	10分間走			
	c1	筋力の強化 調整力の向上 持久力の向上		走り	ぶら下がり	上体起こし			10分間走 柔軟体操			
	c1	からだづくりへの意欲 筋力の強化 持久力の向上		走り		上体起こし ボール投げ 上げ		上体そらし パーピー 倒立	10分間走 ボール運動			

②「からだづくり養訓」の取り組み

本校では、からだづくりに関わる特設時間での一斉養護・訓練を「からだづくり養訓」と称している。従来、小学部、中学部では、「リズム・サーキット」、高等部では「朝の活動」と、その名称は学部によって異なるが、これらが「からだづくり養訓」に該当するものである。

その課題、及び指導内容や指導方法について表3に示すようにまとめあげた。

小学部及び中学部は、からだが分化していく過渡期にあり、感覚運動機能の発達が主たるねらいとなる。高等部になれば、特別な発達の遅れのある児童生徒は例外として、一般的には、筋力の強化、持久力の向上が主たるねらいとなる。さらに健常者と比較して、特にからだに課題が見あたらない生徒たちがいるが、これらの生徒たちには、自己のからだを認識させ、自分のからだを意識的に高めていく意欲をもたせること、この事が大きなねらいとなる。

また、指導方法についてみれば、小学部、中学部ともに感覚運動の発達をねらっているが、小学部においては、基本の運動を一つひとつ正確に経験させることをねらいとしているのに対して、中学部では、これらの事がある程度できることを踏まえて、いろいろな種類の運動をサーキットでつなぎ、豊富に経験できるよう配慮している。さらに、高等部になれば、実施している運動の種類こそ少なくなるが、一つの運動の時間が長くなり、それによって持久力が向上するように考えられている。また、運動内容の選定においても、筋力の強化をねらったものが入り入れられている。

このような段階的発展性について、検討し、共通理解した。しかし、運動内容の選定及び指導方法、評価法については、まだ多くの課題が残された。

(2) 本年度(4年次)の取り組み

本年度は、昨年度から重点的に行っている「授業づくり」をさらに充実・発展させていくことを共通理解し、実践に取り組んだ。具体的には、①「授業づくり」のさらなる模索、②「からだづくり養訓」のさらなる充実、③評価法の再検討及び評価、について研究実践が行われ、十分とは言えないまでも、一応の区切りとして、4年間の実践がまとめあげられた。

①「授業づくり」の取り組み

昨年度までの研究の成果に基づき、本年度は、各学部を中心として、さらなる「授業づくり」の取り組みがなされた。各学部が、各々の観点から「授業づくり」を充実させていくことになった。

小学部においては、「からだを動かすことを楽しむ子」を「遊び活動」を媒体として目指してきたが、本年度は特に、この「遊び活動」をあらゆる教科・領域の授業の中により意図的・組織的に設定し、児童がより積極的に授業に参加できるような方策が検討され、実践された。また、本年度は「なかよしタイム」という遊びを教えたり、児童たちの生活の中で見られた遊びをさらに発展させたりする時間が設けられるなど新しい試みがなされた。

中学部においては、「楽しんで、力いっぱいからだを動かす子」を目指し、「遊び的労働」を媒体とした研究実践が行われてきている。昨年度は、からだづくりを目指した年間指導計画の作成及び個が生きる集団学習の工夫について十分検討されてきたが、本年度はその成果の基に、もう一度題材選定

に遡って厳しい吟味がなされることになった。手ごたえのある題材を個々の生徒に応じて与え、じっくり取り組ませることが重視され、どの生徒にも取り組み、かつ完成度に幅のもたせられる題材が模索された。また、年間指導計画における題材の発展性、また個における一年毎の発展性が考えられるなど、綿密な「授業づくり」が指向された。

高等部においては、「すすんで生き生きとからだを動かす子」を目指し、「労働」を媒介とした研究実践が行われている。主たる実践の場は職業科であり、この職業科を中心に「授業づくり」がなされた。本年度は、この職業科において「同一教材・複数課題」という問題（どの生徒にもできる題材をさがすこと、また個の実態に応じて課題を与えること）が重点的に検討され、実践された。また、作業時間及び作業態度について、実社会に近い対応が要求される校内作業実習の実施回数を増やし、「労働」する意欲・態度の向上が図られた。

②「からだづくり養訓」の取り組み

昨年度までの成果を基に、各学部単位で積み上げられた。

小学部においては、昨年度の実践で弱かったところのリズム（主として聴覚機能と運動との連合をねらうもの）を強化するため、昨年度より実施している「リズム・サーキット」に、週1回「リズム遊び」と称したリズムを中心に行う日を新たに設けて実践してきた。この「リズム遊び」の発足によって、聴覚機能と運動との連合をねらった実践が強化されるとともに、児童たちがより楽しんで取り組めるようになってきている。

中学部においては、「サーキット運動」と「リズム表現」の2本立てによって実践がなされているが、本年度は、これまで行ってきた「サーキット運動」の評価表が作成され、より具体的に評価できるようになった。また、昨年度まで行ってきた「リズム運動」は、これまでのプログラムにそった課題的な内容を一律に行わせるより、生徒自身が主体的にからだを生き生きと動かすことの方が、からだづくりには有効であるとの考えから、「リズム表現」と改称し、新しい実践が行われるようになり、その成果も現れてきている。

高等部においては、昨年度までは、主として運動能力・体力という観点に重きを置いたグループ編成をしてきたが、本年度は、身体及び身体機能の障害という観点に重きを置いたグループ編成が行われた。また、高等部の全生徒が一斉に取り組む10分間走においても、本年度は、自分でしようとする意欲、最後までがんばりぬく気力など精神的な面が強調され、実践された。その結果、障害の重い生徒も、自分のペースではあるが、自力で完走できるようになってきている。

③評価法の再検討及び評価

本年度は、中学部において、サーキット運動について、「サーキット段階表」が作成された。また、高等部においては、昨年度から検討され続けてきた「職業科における評価の基準表」が作成された。これらの評価表を作成したことによって、評価がある程度客観性を帯びたものになると同時に、現在の実態を踏まえ、次はどの段階を目指すのか、また指導者はどのような補助・援助をしたら良いのかわかるようになったという意味で、意義のあることであったと考える。